

稲城の黑板は稲城のアーティストの手で。



夏休み明け初日。今日から学校かと少し重い気持ちを抱えて登校する子ども達が、教室に入って黑板いっぱい広がるアートを見た瞬間、アートの持つ力に元気をもらう。

きっかけは、武蔵野美術大学が近隣自治体の学校で実施していたという黑板ジャック。

「稲城の黑板をジャックさせる訳にはいかない」と、稲城のアーティスト達が芸術文化団体連合会を通したり、口伝てに誘い合ったりして集まった。第四小学校の校長先生に話をもちかけ、稲城のアーティストの手による黑板アートが実現したのが平成27年。以来、毎夏、市立小学校で実施している。

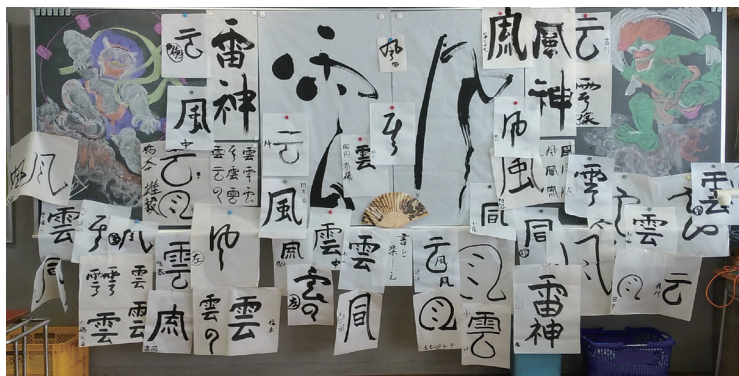
黑板と7色のチョークだけを提供してもらい、夏休み中に手弁当で校内の黑板をアートで埋め尽くす。学校にはなるべく負担をかけずにやるのが長続きするための秘訣だ。子ども達にはサプライズで、制作者が楽しみ、子ども達が楽しみ、先生達も巻き込んで一緒に楽しむ。

今の時代、子ども達は多くの物を背負っている。感情を素直に表現できない子もいる。それを一時的にせ



よ開放してあげたい。その思いが黑板アートに生きている。

黑板アートを見て子ども達を書いた感想文には、率直な声が綴られている。「元気になった」「2学期もがんばりたい」。厳しい感想もちろんある。子ども達のそんな感想がもらえる達成感から、制作者は黑板アートに「はまる」。



参加するアーティストは様々で、画家はもちろん、絵本作家、ゲームキャラクターデザイナー、サラリーマン、書家もいる。

書もまたアートだ。風神・雷神の絵とともに黑板に貼られた「雲」と「風」の書。どんな雲、どんな風を表現したいか投げかけて、子ども達から引き出した千差万別の「雲」と「風」。それは、アーティストだからこそ、子ども達にあげられる「アートの力」。

稲城には地域に貢献できる力を持っているアーティストがたくさんいる。子ども達に良いものを届けたい。アーティストの独り善がりにならず、行政ともタイアップして、「アートの力」で良いまちにしていきたい。

そんなシビックプライドを持つアーティスト達の活動が、毎夏、小学校で繰り返されている。

「住み慣れた稲城に安心して住み続けられる支え合い」

「住み慣れた地域に安心して住み続けたい」というだれもが持っている望みを、地域での支え合いによって実現しようと活動する特定非営利活動法人 支え合う会 みのり。

活動開始のきっかけは、1973年、公民館主催講座に参加し高齢者問題について勉強したこと。その後も勉強会を継続し、1984年に8人のメンバーで「稲城の老後を支える会」を設立。人間としての尊厳を持って、生涯にわたり在宅で暮らしていくには、「食事」がまず基本であるとの考えを実践に移し、高齢者の会食会を始めた。後に、脚が悪くなって会



食会に来られなくなった人にも同じ食事をとの思いから夕食配食サービスが始まり、ほかにも、ミニデイサービス「たまりば」や居場所づくり「カフェいしださんち」等、今日の全ての活動に『食』が絡む。

人のお世話になることは心情的にハードルが高かった時代。食事の用意が大変でも、ファミリーレストランやコンビニなんてない時代。高齢者の『食』に対する支援が必要だと、先を見据えたメンバーが始めた活動。少し多めに作ったおかずを、お隣さんにお裾分け…そんな感覚の延長で始まった会食会も、当初は、シルバー産業に乗り出したと不評だったという。

それでも多くの人に必要とされ、会員を増やし、支え合いの活動は今日まで続いてきた。1989年に「稲城の老後を支え合う会」と改称し、2000年には地域社会での支持や信用を確かなものとするために法人格を取得、特定非営利活動法人「支え合う会 みのり」となった。短くない歴史の中で、参加者同士の新しいつながりが広がり、食事サービス活動を通して、地域の間人関係を結びつける役割も果たしてきた。活動により高齢者の問題や地域福祉に関心を持ち、住民参加の福祉のまちづくりにも一役買っている。



スタッフとしての活動を終え、利用者側になる人もいる。支える側から支えられる側へ。そうして循環していくのが望ましいが、若い世代は共働きも多くなり、なかなか新しい仲間が増えず、また、それなりの責任が生じるリーダーのなり手は不足気味だという。担い手も高齢化が進み、活動は大変になってきている。

けれども、新型コロナウイルス感染症の影響で様々なイベントが中止となっている中、みのりの会食会が安全で安心して出かけられる唯一の場所という声が寄せられている。だ

から、がんばる。家にいると人と話す機会がなく、夕食配食の配達スタッフとの会話がその日初めてだという人もいる。だから、必ず手渡して体調を聞き、世間話をし、会話を大切にする。

「自分達が利用する立場になった時に、利用したいサービスでありたい。」設立時のそんな思いを原動力に、シビックプライドを持つ人々が、昔も今も「支え合う会 みのり」で活動している。

「カレーで稲城を盛り上げよう」

『カレー好きによる、カレー好きのためのイベント』が、平成30年秋、市内で初めて開催された。

きっかけは、出版・編集制作・イベント運営を行なう市内の会社、株式会社インターメディアリーが、地域情報誌『グレーピア』で市内のカレー店について特集したこと。「稲城にもこんなにお店があるんだ」と、居住する地区を越えて、市民の反響が大きかったという。カレー好きである同社の代表取締役を通して市内のカレー好きが集結し、「カレーで稲城を盛り上げよう」と実行委員会が結成された。



手始めに開催されたのが、7店のカレーを食べ比べできる「稲城カレーフェスタ2018」。市民手づくりのイベントで、チケット売場が行列になったり、カレーが品切れになったり、課題も残った。様々な反省点を見直し、翌年には9店参加で「いなぎカレーパーク2019」を開催。

そして、2020年。新型コロナウイルス感染症の影響で、集合型のイベントは開催できなかったが、コロナ禍に苦しむ市内の個人店の応援も目的に加え、みんなが様々な店を知ることができて、みんなで楽しめたらと、市内のお店をめぐってスタンプを集める「稲城をめぐるカレースタンプラリー2020」を企画した。

市内の飲食店、約250のうちカレーを提供する店をリストアップしたところ、その数は、91店にのぼった。「カレーで稲城を盛り上げる会」のメンバーで地区別に担当を決め、リストの店に声をかけて回った。メンバーの熱意を受け、21店が参加した。



そもそも、カレープロジェクトは稲城オリジナルのカレー粉を作ろうという企画だったという。しかし、市内の様々な店を知っていくと、どの店も、店ごとに創り上げた「味」がある。それをそのまま応援して市民に知ってもらえば、もっと盛り上がるのではないかと考えるようになった。

お店やお客がイベントを企画するのは難しい。第三者だからこそ、地元の会社だからこそ、できることがある。イベントを開催すると、クレームもあるし、利益になる訳でもない。けれども、怖い顔の店主は話してみると良い人で、地域の人と人の顔の見えるつながりができ、それが財産になっていく。『インターメディアリー』という会社名の意味のとおり、仲介者・架け橋となって、いろいろなイベントを行ない、会社も、市民も、地域も盛り上げる。一市民として、地域に根差す会社として、できることを考える。

自分達の好きなカレーをもっと知ってもらい、みんなで応援し、稲城を盛り上げようという、シビックプライドを持つカレー好き達の活動。こうした活動が受け入れられるのは、やる気のあるお店が

あり、市民が自主的・積極的に活動する稲城の昔からの土壌があるからこそである。今日もカレー好きな市民が市内を巡り、楽しみながらまちを盛り上げている。

「自分の家庭は自分で守る」 「自分達の街は自分達の手で守る」がスローガン

「家庭奉仕の合間みて、婦人の代表者数名で消防署長様をお訪ねして、防火のお手伝いというようなことを申し入れました。」（初代稲城市婦人防火クラブ会長 遠藤 初子 氏『10年のあゆみ』より）

この女性達の行動から、昭和 57 年 11 月 15 日、東京都内で最も早く稲城市婦人防火クラブが誕生した。



平成 16 年には、市内の女性ならだれでも加入できるように、「稲城市女性防火クラブ」と名前を変え、現在では「明るく楽しくやりましょう」がモットーの会長を中心に、市内の元気な女性達が活躍している。

友達や、友達の友達に誘われて加入し、「自分の家庭は自分で守る」を合言葉に、市や消防本部、消防団、災害防止協会、防災関係団体とともに、防火・防災意識の普及啓発や防犯活動を行なう。

女性防火クラブとしての活動にとどまらず、「女性防火クラブ員として何か

できないか。」といったクラブ員それぞれの気持ちが、地域の活動の中でも活きている。例えば、長時間にわたる火災現場で消火活動にあたる人達に飲み物や軽食を差し入れたり、火災で焼け出された人達におにぎりや汁物等の食事を作って差し入れたり。令和元年の台風 19 号の際には、高齢者と一緒に避難したり、避難所で避難市民に声かけをしたり、率先して行動した。

こうしたシビックプライドを持つ女性達が、安全で安心して住める稲城のまちづくりのため、女性防火クラブの活動や人脈を発端に地域の防災リーダーとして日常の中で活動している。

彼女達が、Iのまち いなぎ 市民まつりや桜・梨の花まつりへも女性防火クラブとして参加する等、楽しみながら地域に密接に関わることで、「自分達の街は自分達の手で守る」といった意識が広がり、稲城の地域災害対応能力を高め、災害に強いまちの一助となっている。



「昨日よりちょっと幸せ」



「新型コロナが落ち着いた頃に、大好きなお店達がつぶれてなくなっていた。そんなまちになってほしくない。」
学校が一斉休校になり、人々が外出自粛していた令和2年3月。世の中は暗いニュースが流れ、閉塞感が漂っていた。飲食店から客足が遠のき経営が苦しくなる一方、各家庭は在宅の家族の三食を用意する日々で疲れていた。

何かできないかと考える人達がいた。「暮らしをちょっと便利にする道具」であるテクノロジーにより、「みんなの暮らしがワクワクして、昨日よりちょっと幸せ」になるよう活動するコミュニティ『Code for INAGI』。

飲食店はテイクアウトやデリバリーへと業態を切り替えているが、その情報はお店ごとに散らばり、日々の一食をお弁当にしたい人達には届いていない。

美味しい料理を提供しようと頑張る飲食店と、お店を応援したい人、お弁当を買いたい家庭とのマッチングが「ちょっと便利に」なるよう『Code for INAGI』は動き始めた。多摩地域の市民の行動が全国へ広がり、数多くのメディアにも取り上げられた「お弁当プロジェクト」だ。テイクアウトやデリバリーができる近隣の飲食店の情報が地図上に表示され、近所で利用できる店が一目で分かる。

きっかけは、デリバリーできる飲食店をアプリにまとめた『こだいらあたりで Civic Tech』。こんなのあるよと教えてくれたのは『Code for Fuchu』。その情報を受けて『Code for INAGI』は稲城版アプリを1日で



作った。完成度の高くないアプリへの様々な声もあったが、世に出した。飲食店も市民も疲弊している中、みんなの「困った」を1日でも早く解決することを優先したからだ。そうした思いで始まった「稲城お弁当プロジェクト」。

『Code for INAGI』のメンバーや飲食店だけではなく、利用する人もお店の情報を入力し、一緒に作り上げていく、参加型が特徴のアプリ。掲載する際には、必ず店主に挨拶をして確認をとる。稲城の「人」と「テクノロジー」の融合。

まちにある「困った」を何とかしたいという「思い」があり、解決できる力を持つ人がいる。そこに、人と人との顔の見えるつながりがあるからこそ、「困った」と「思い」をマッチングするテクノロジーが生きてくる。

商工会にも協力を依頼し、信用・情報・費用面での弱点を補った。活動は稲城市全域に広まり、2度のチラシ全戸配布が行なわれ、商工会によるデリバリーも実現した。

このまちに暮らす人達が、自分の「ちょっと得意なこと」で、楽しく住みやすくなるきっかけや流れをつくる。みんながまちの中の「楽しそうなこと」に関わりたくなる、活動したくなる。そうした気持ち、思い。それがシビックプライド。

市民が、企業が、行政が、それぞれの得意分野で楽しみながらまちをつくる。それがシビックプライドにつながり、稲城に「昨日よりちょっと幸せ」な暮らしが広がっていく。

